

---

親  
鸞  
讚  
歌

---

第一章 親鸞聖人が生きた時代

一 鎌倉時代―日本の変革期

- 1 武家の台頭 002
- 2 アジア世界の変動 005
- 3 『大無量寿経』の伝統 007
- 4 インド仏教の衰亡 012

二 日本仏教の改革者

- 1 開拓者・法然上人 014
- 2 「ただ念仏」の選び取り 018
- 3 念仏に救われるものの凝視 023

三 法然上人の仏教運動への弾圧

- 1 専修念仏の共同体の形成 029

第二章 親鸞聖人の誕生

一 親鸞聖人の人間像

- 2 法難を招いたもの 032
- 3 元久の警告 034
- 4 承元の法難 039
- 5 嘉禄の法難 048

- 1 聖人の二つの絵像 056

- 2 聖人の人間像を表す三つの言葉 060

- 3 教信沙弥の定 063

- 4 某閉眼せば、賀茂河に棄てよ 067

- 5 一人いて喜ばば二人と思ふべし 073

二 親鸞聖人の誕生

- 1 親鸞聖人の生いたち 079

- 2 比叡山の親鸞聖人 087

- 3 法然上人の修学 091

- 4 堂僧をととめる聖人 096

079

056

055

029

014

002

001

### 第三章 念仏する仏者に

#### 一 六角堂での参籠

- 1 後世を祈る 100
- 2 参籠する聖人 105
- 3 観音菩薩の夢告 109

#### 二 吉水入室

- 1 法然上人に遇う 113
- 2 親鸞聖人の回心 119
- 3 信心一異の諍論 127
- 4 『選択集』の書写 139
- 5 承元の法難 147

### 第四章 流罪と関東行化

#### 一 愚禿釈親鸞の名のり

- 1 愚癡の法然房にあらためて遇う 160

099

100

113

159

160

### 第五章 浄土真宗の開頭

#### 一 『教行信証』を書く

- 1 嘉祿の法難 204
- 2 仏教の現状への悲歎 207
- 3 著作する親鸞聖人 210

#### 二 『教行信証』の大綱

- 1 真宗開頭の根本論 215

203

204

215

#### 二 同朋の共同体の形成

- 1 関東への移住 175
- 2 教化する親鸞聖人 180
- 3 同朋の共同体 187
- 4 教団形成の志願 192
- 5 神祇不拝と冥衆護持 197

175

2 妻帯 164

3 親鸞の名のり 169

2	真実の仏道	217
3	真実教の開顕	218
4	真実行の開顕	223
5	真実証の開顕	226
6	二種回向にたまわる仏道	228
三 「いなかのひとびと」に宛てて		
1	和讃	235
2	文意	238
四 入 滅		
1	浄土に還帰せしめけり	243
2	頭北面西右脇に臥して	245
親鸞聖人年譜		
あとがき		
253		
248		
243		
235		

凡 例

- 一、『真宗聖典』は、真宗大谷派宗務所出版部発行のものを使用し、一部筆者が漢文を書き下し文に改めました。
- 一、『真宗聖教全書』（大八木興文堂）は真聖全としました。
- 一、本書の引用文については、読みやすさを考慮して文字の一部を現行の表記に改めました。

---

第一章 ◆ 親鸞聖人が生きた時代

---

## 一 鎌倉時代—日本の変革期

### 1 武家の台頭

インドに華開き、中国という広大な地域と高い文化をもった「世界」の、無数の人びとの心を潤<sup>うるわ</sup>してきた仏教が、完全に日本人のものとなったのは、十三世紀の鎌倉時代の頃でした。七世紀の頃仏教が日本に伝えられてから、実に六百年の時間が流れています。いま完全に日本人のものとなった仏教といったのは、インドの仏教を、あるいはまた中国の仏教を、そのまま移した仏教ではなくて、日本の文化の伝統にしっかりと根をおろして、しかも新しい精神生活や価値観を生み出していくような、独自の仏教が形成されたということです。さらに、知的にすぐれた限られた人々だけでなく、むしろ働く民衆の心の

ひだの底にまで分け入って、「因果応報<sup>いんがうおうほう</sup>」をおそれ「吉凶禍福<sup>きつこうかふく</sup>」に迷うような、暗い精神生活の闇の中<sup>ちやみ</sup>にうごめくように生きている人間を、明るい智慧<sup>ちゑ</sup>の自覚道<sup>じかくどう</sup>に立たせ、大悲<sup>だいひ</sup>の中に生きる安らかさに目覚めさせていくような、おおらかな仏教の創造をいうのです。

私たちが「鎌倉仏教」と呼んでいるこの独自の仏教が形成されたのは、たまたま鎌倉時代に次々と現れた、法然<sup>ほうねん</sup>上人<sup>しょうじん</sup>を先駆<sup>せんく</sup>とする幾人かのすぐれた仏教者たちの、自分自身の救い<sup>こゝろしん</sup>をかけての渾身の努力<sup>こんしん</sup>によってでありました。私たちが宗祖<sup>そうそ</sup>と仰ぐ親鸞<sup>しんらん</sup>聖人は、その法然<sup>ほうねん</sup>上人<sup>しょうじん</sup>の「専修念仏<sup>せんじゆねんぶつ</sup>」を旗印<sup>はたじりし</sup>とする、選択<sup>せんじやく</sup>本願<sup>ほんがん</sup>の念仏<sup>ねんぶつ</sup>に立つ往生<sup>おうじやう</sup>浄土<sup>じやうど</sup>の仏道<sup>ぶつどう</sup>の提唱<sup>ていじやう</sup>をうけて、これをさらに展開<sup>せいかん</sup>した仏者<sup>ぶつしや</sup>です。そして日本における真<sup>まこと</sup>の大乗<sup>だいじやう</sup>の仏道<sup>ぶつどう</sup>として、もつと正確<sup>せうさく</sup>に言えば如来<sup>にがひ</sup>の誓願<sup>せいがん</sup>によって実現<sup>じつげん</sup>する「一乗<sup>いちじやう</sup>」の仏道<sup>ぶつどう</sup>、すなわち「誓願<sup>せいがん</sup>一仏乗<sup>いちぶつじやう</sup>」として輝<sup>かがや</sup>かすという、歴史的<sup>れきし</sup>の事業<sup>じぎやう</sup>を果<sup>は</sup>たし遂<sup>つひ</sup>げた仏者<sup>ぶつしや</sup>であったのです。

鎌倉時代、それは日本の歴史<sup>れきし</sup>の上で、画期的<sup>えきてき</sup>な大転換<sup>だいてんげん</sup>の時期<sup>じき</sup>の一つでした。この時代の日本は、天皇家<sup>てんげ</sup>およびそれと複雑<sup>ふくざ</sup>な縁籍<sup>えんせき</sup>関係を結<sup>むす</sup>んだ摂関<sup>せつかん</sup>家の藤原氏<sup>ふじわら</sup>を中心とする王朝貴族<sup>てうわうきしゆ</sup>たちが、全国<sup>ぜんこく</sup>に広大な莊園<sup>しやうえん</sup>をもつ、いわゆる莊園<sup>しやうえん</sup>の支配<sup>しはい</sup>を基本的な枠組みとする古代的<sup>こてき</sup>な律令<sup>りつりやう</sup>体制<sup>たいせい</sup>がなお社会<sup>しやかい</sup>の基軸<sup>きせき</sup>となっておりまし。そして仏教は、ある研究者<sup>けんぎゆしや</sup>が「頭密<sup>けんみつ</sup>体制<sup>たいせい</sup>」と性格<sup>せいかく</sup>づけたように、この国家<sup>こくが</sup>の体制<sup>たいせい</sup>と完全に一体<sup>いつたい</sup>となっていたのです。「鎮護<sup>ちんご</sup>

国家」という理想のもとに、王朝の權威を宗教的・思想的に名分づけ支えることが、仏教に期待された役割でした。後白河法皇のように出家した上皇たち、あるいは親王たちが入寺する門跡寺院など、あるいはまた僧侶であつてしかも国政にかかわつた「黒衣の宰相」などと呼ばれた人を想い起こせば、大方の見当がつくでしょう。

しかしながらそれに対して地方の武士たちが、莊園の管理や地方の警察権を担当するなどして次第に実力をたくわえていきました。そして新しく封建的な社会関係を結びながら、その社会的な影響力を拡大していくのです。やがて源頼朝を「武家の棟梁」として結束した武士たちは、都の伝統的な王権に対して鎌倉に幕府を創設し、国家統治の覇権を争うことになっていきます。都の王朝と鎌倉の幕府と、この両者の緊張が火を噴いたのが「承久の乱」（一二三一年）でしたが、勝利をおさめた幕府は全国に地頭を派遣し、武家の統治を全国的な規模に拡大していったのです。

親鸞聖人が生き、そして「真宗開顕」の仕事を展開していったのは、この歴史的な変動と変革のただ中でありました。見当をつけるために、聖人在世中の主なでき事を、いくつか取り上げてみましょう。

一一七五年（親鸞三歳） 法然、専修念仏を唱える

一一八〇年（八歳） 源平の争乱

平氏、東大寺・興福寺を焼く

一一八五年（一三歳） 平氏滅亡

一一九二年（二〇歳） 源頼朝、征夷大将軍となり、鎌倉に幕府を開く

一二〇七年（三五歳） 承元の法難

一二二一年（四九歳） 承久の乱

幕府、後鳥羽上皇を隠岐へ配流

一二二七年（五五歳） 道元、『普勸坐禅儀』を著す

嘉祿の法難

一二六〇年（八八歳） 日蓮、『立正安国論』を著す

## 2 アジア世界の変動

このように鎌倉時代は日本社会の歴史的な大変動期でしたけれども、もし視野をアジアに拡げてみれば、アジア世界もまた大きな変動と動乱の時代に入りつつありました。チングス・ハーン（一一六一―一二二七）に率いられた蒙古族が中国大陸を征覇し、さらに進ん

で中央アジアから東ヨーロッパにまで進攻して、文字どおり世界的な規模の大帝国をうち建てるといふ、東アジアの全域にわたる大変動が始まってくるのです。蒙古族の建てたこの帝国が「元」ですけれども、元のアジア征覇の怒濤は日本にも及びました。「元寇」と呼ばれる二度にわたるその日本進攻は、幸いにも台風に妨げられて成功はしませんでしたけれども、日本の全体を深刻な恐怖と危機感の中に陥れたのでした。

現代と違い、情報の素早い伝達と状況の全体的な把握が不可能な時代でしたけれども、鎌倉仏教を形成した仏教者たちの敏感な歴史感覚に、迫ってくるこの世界史的な大変動の予感、有形無形の影をおとしていたのではないのでしょうか。現に日蓮上人はこの危機的状況の中で、『立正安国論』を書いて幕府に直言し、さらに激しい行動をもってその信念を訴えています。鎌倉時代の仏教者たちに共有されていた「末法」の危機感、直接には日本社会の歴史の変動が生んだ歴史感覚ですけれども、その底にいま述べたようなもっと広い、いわば世界史的な地殻変動の予感がひそんでいるとさえ、私には思われてくるのです。

### 3 『大無量寿経』の伝統

さらに眼を、仏教の故郷であるインドに向けてみましょう。インドの大地に誕生して厳肅な「解脱道」を世に示し、やがて大乘仏教の華を開かせた仏教は、この十三世紀の頃、滅亡の時を迎えるという悲劇に遭遇していったのです。

インドの仏教はよく知られているように一世紀の頃から、釈尊の本当の精神を、すべての衆生を平等に救うことを願いとす「大乘」として掲げる「大乘仏教運動」として、再展開を遂げていきました。大乘仏教は、たとえば『阿含経』などが伝えているような、歴史的な存在としての釈尊をそのまま継承する伝統主義的な仏教とは違って、釈尊とはそもそもどのような人格であり、その得られた正覚とはどのような内容をもつ叡智であるのかを根本からあらためて問いながら、それについての知見を壮大なスケールと絢爛たる表現をもって物語る、すぐれた大乘経典を生むという形をとって展開していきました。それだけではなく、豊かな文学的表現をもって物語られる仏道の知見が、どのような真理性をもつのかということを思想的に明らかにする、数多くのすぐれた論書や註釈書を生み出していきました。これらによって大乘の仏教運動の内容を形成しながら、大乘仏教は興起



し、展開していったのです。

その大乘經典を代表するものとして、私たちはたとえは『無量壽經』(『大無量壽經』)を、『般若經』を、『華嚴經』を、そして『涅槃經』を、さらに『法華經』をあげる事ができます。それに加えて大乘仏教の知見を思想的に明らかにした偉大な思想家が次々に世に出たのですけれども、その代表として、たとえばドイツの哲学者ヤスパースが人類の最もすぐれた思想家を取り上げたシリーズの中の『仏陀と龍樹』で尋ねている、『根本中論』において「空」の知見に立って大乘仏教の真理性を顕揚した龍樹菩薩(二一三世紀頃)、あるいは『唯識三十頌』などの著作において唯識教学を大成した世親菩薩(天親四一五世紀頃)がいますが、人類の精神史に関心をもつ人で、これらの偉大な大乘仏教の思想家の名を知らない人は、おそらくいないでしょう。

よく知られているように龍樹菩薩は「第二の釈尊」と仰がれ、「八宗の祖」と尊敬される仏者ですし、世親菩薩はその数多くの著作によって「千部の論主」と呼ばれた、人類の精神史の上で第一級の思想家です。注意したいのは、親鸞聖人がこの二人の大乘の仏者を、浄土真宗の伝統を形成した最初の祖師と仰いでいることです。そのことには、聖人が身をもって生きた本願の仏道である浄土真宗が、堂々たる大乘の仏道であることをはっきりと

示そうとする、親鸞聖人の強い願いがいかににもよく感じられます。このことを思うとき、親鸞聖人が仏道に心を開かれた自分自身の体験を、深い恩徳感を湛えて述べている言葉が、私には自然に想い起こされてきます。

ここに愚禿釈の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈、遇  
いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。真宗の  
教行証を敬信して、特に如来の恩徳の深きことを知りぬ。

〔「教行信証」真宗聖典150頁〕

親鸞聖人が開顕した仏道である浄土真宗は、はじめに述べたように、完全に日本人のものとなった仏教です。しかしその浄土真宗の伝統を形成した仏者たちについて、聖人はこのようにインド、中国そして日本を見ながら、それを尋ねております。インドも中国も、それ自体が一つの「世界」であるといつてよいほどの、きわめて高い文化を形成した広大な地域です。だから真宗を開顕する親鸞聖人の眼は、広く「世界」に向かって開かれていたといわなければなりません。このことをまず私たちは、肝に銘じてはつきりと承知しておきたいと思えます。

さて、いま私は代表的な大乘經典のいくつかをあげました。これらのすぐれた大乘經典は、中国においては、中国仏教の諸学派（宗）を生んだ教説として尊崇そんすされるのですが、現在でも龍樹菩薩や世親菩薩の著作とともに、わが国でも多くの心ある人びとによって「聖典」として読まれ、研究されています。そして生きた教えとして宗教的感動を呼び起こし、読み学ぶ人に智慧ちえの眼を開いているのです。

それらの大乘經典の中で、私はことに親鸞聖人が「真実の教」と仰いだ『大無量寿経』について、十分の注意をはらいたいのです。この世に生きて苦悩するすべての衆生を、平等に救おうとする大悲と、その救いを実現する世界として浄土の建立とを、阿弥陀如来の「本願」として説くこの經典は、大乘の数多くの經典群の中で最も早い時期に編集されたものの一つなのです。しかも「五存七欠」といわれるように、十をこえるテキストが編集されて、ずいぶん幅広い感化を与えてきたと考えられる大切な大乘の經典なのです。しばしば耳にする見解として、大乘仏教が展開したのちに浄土教が興おこったのだとする見方がありまされども、事実は決してそうではありません。たしかに中国の浄土教は、やや遅い時期に編集された『観無量寿経』に大きな感化を得て展開していきますので、こういう印象を与えるかもしれません。しかしながら『観無量寿経』が説く往生浄土の道は、『大

無量寿経』に説かれる如来の本願によって実現するものですから、『大無量寿経』はいわば往生浄土の仏道を支える大きな伝統として、脈々と伝承され続けてきた教説であるといふべきです。ですから『無量寿経』によって立つ浄土教は、大乘仏教の興起とともにその歩みをはじめた、最も古い大乘仏教の伝統の一つであることにこそ、私たちは注意を注ぎたいのです。



親鸞聖人  
〔安城御影〕東本願寺蔵